(別紙　２)

審査の結果の要旨

氏名　小野　泰教

本論文は、儒学の基本的な教えである「修己治人」をめぐり、士人の自己修養と社会秩序の形成・安定がいかなる関係において理解されたかという問題を、清末知識人である郭嵩燾の事例にそくして考察しようとするものである。郭の思想営為が、同時代の士人である劉錫鴻との比較を通じて、またそのイギリス滞在経験を通じて、近代中国における理想的な士大夫像の模索の過程としてあぶり出される。

論文は全 3 部、 9 章からなる。第 I 部は、郭嵩燾が同時代の士大夫に求めた資質を、彼自身が釐金業務に関わった経験や西洋領事との交際、さらには聖諭宣講への取り組みなどの面から、具体的に考察する。そこでは、士大夫の商賈化に対する強い危機感にかられて、郭が「士」と「商」の明確な役割分担の下、士大夫間の良好で緊密な関係の構築こそが、社会の秩序形成の根幹をなすと考えていたことが指摘される。第Ⅱ部では、1870 年代末に同じく外交官としてイギリスに滞在した郭嵩燾と劉錫鴻の西洋観の比較がなされ、両者が西洋の「官民」関係について対照的ともいうべき理解を示したことを、彼らの遺した日記などの資料をもとに分析する。西洋の富強の源が民の力にあり、議会は官民の意思疎通を有効にするすぐれた装置だと考えた劉に対して、郭は議会そのものよりは官と官の関係に着目し、彼らを結ぶアソシエーションの活動に理想的な士大夫像を見出した。第Ⅲ部では、以上の考察を踏まえて、郭嵩燾の官僚としての活動やイギリス観察のもととなった思想が、その経書・諸子の読みに原型的思考様式として表出されていることを、『大学』『中庸』や『荘子』の解釈にそくして明らかにする。

本論文は、これまで西洋の「進んだ」文明の理解者として位置づけられてきた郭嵩燾について、その言動の意味を釐金業務やイギリス経験など具体的な文脈の中で解きほぐし、その思想の核心が一貫して「修己治人」の実現にあったことを指摘する。

論文審査にあたっては、「伝統」と「近代」、「西洋」と「中国」の間で、理想的な士大夫を求めつつ、中国の政治社会の現状を批判した郭嵩燾の思想を体系的に抽出することに成功している点が高く評価された。とくに、郭嵩燾の西洋観察がその経書解釈と深く連動していたという指摘は、中国近代思想史研究に対する本論文の大きな貢献であるといえる。ただ、礼制・刑罰や政教関係など、秩序形成に関わる同時代の現状と問題点を郭嵩燾がどのように認識していたのか、本論文では触れられるところが少ない。ほかにも文中提起される個別の論点について、さらに考察を深める余地が残されているとの指摘が複数の審査員からなされた。とはいえ、本論文が達成した大きな成果にかんがみて、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと審査委員会は一致して判断した。